

## わたしたちの恥を取り去ってください（イザヤ書 4 章 1 節）

### —旧約聖書における女性と生殖性

中ノ瀬重之（神言会司祭）

古代イスラエルの父権制社会において、子を産み育てることは、大切なそして当然の女性の義務とされていた。この歴史的な脈絡のもとで、不妊の女と結婚しない女は差別を受けた。そのうえ、イスラエル史のある期間においては、特定の社会的利益に関連して、子を産み育てることに政治的干渉が強化されていた。女性の身体は管理され、律法の支配下に置かれ、儀式に縛られていた。旧約聖書のなかの出産に関する記述に目を通してみると、今もなお女性の身体に何らかの強制が課せられているということに気づかされる。女と男の良い関係を構築するために、平等で助け合う社会をつくる努力が求められている。

「おやっ、いい雨だ！ノルデスチ（ブラジル北東部）に住む者にとって、雨はいつも希望と祝福のしるしです。私たちはセルトン（乾燥地）のように、いつも雨ごいをしています。乾季には生活がさらに厳しくなります。この社会にあって、女であり、貧しく、黒人で、40歳以上であることは、不運で見捨てられた生活を余儀なくされる4つの原因です。しかし、社会から呪われ、のけ者にされる私の初めての体験は、それらの原因とは別のところからやってきました。私はノルデスチの出身です。19歳で結婚しました。結婚後4年経ってやっと妊娠しました。それが何を意味するか想像してください！『子を産まない女は呪われている』とさんざん言われたものです。子供がなかったのも、あの田舎のどかな生活のなかで何もすることがなく、私はひたすら聖書を読みました。私が注意を惹きつけられたのは、不妊の女について書かれた箇所でした。サラやハンナ、それから誰だったか思い出せませんが、その他の女たちの話を読みました。読んだのですが、よく理解できませんでした。そして子を産めない不運、母になれない私の悲しみは続いていました。決して子供を授かることはいらないだろうと思っていました。男の子の夢を見ました。それで自分の息子を産む夢を持つようになりました。というのも、私の姉が、男の子を産まなかったことで夫から責められ悩んでいたからです。姉は女の子を3人産みました。一人生まれるたびに、姉の主人はののしり、迎えに行こうとさえしませんでした。結局、姉には一人も男の子が生まれなかったのです。私の友達や近所の人、学校時代の仲間が、二人とか、それ以上の男の子を持っているのを見ると、拷問を受けているような苦しみを感しました。子供を持たないのは呪いなのでしょうか？誰の呪いですか？（テレーザ、サンパウロ在住）<sup>注1</sup>」

子供に恵まれない生活は、喜びも希望もなく、祝福もない、無きにひとしい人生のように思われ、「子供を持たないのは呪いそのものなのですか？誰の呪いですか？」とテレーザさんは問いを投げかけている。イスラエル史においても、息子を持たない女性たちの苦しみと絶望の問いかけが繰り返されていた。バビロンとの戦争でエルサレムは壊滅し、エルサレムの娘たちも同じような苦しみに見舞われた。

「シオンの男らは剣に倒れ勇士は戦いに倒れる。シオンの城門は嘆き悲しみ奪い尽くされて、彼女は地に座る。その日には、七人の女が一人の男をとらえて言う。

『自分のパンを食べ、自分の着物を着ますからどうか、あなたの名を名乗ることを許しわたしたちの恥を取り去ってください』と。」（イザヤ 3：25-4：1）<sup>注2、訳注</sup>

この嘆きの預言は、エルサレムの崩壊に伴って女たちが陥る状況を苦渋に満ちた筆致で述べている。虐殺され、強奪され、男の数は激減する。男性がいなければ生殖行為は成り立たず、子供は生まれず、名前を遺すことも、家系を存続させることもできない。生存することすら危うくなる。生き延びるために、七人の女たちは一人の男にすがりつく。生存に関する律法は効力を持っている。だから、男性中心の父権制社会にあつては、夫と死別したか、結婚せず子供のいない女性は名前を遺せず、家系も断たれ、財産権や保護を受ける権利、名誉や幸福を確保する術を持つことができない。(出エ 21 : 10)

新約聖書にも、子供の生まれない女性の痛み苦しみを記述した多くの箇所が見られる<sup>註3</sup>。子供を持たなければ、家系を存続させることができず、遺産相続もかなわず、ヤーウエの神の祝福に与れないと考えられていた。女性の役割は、当時の社会の経済や法律、思想や宗教によって、強かに生殖能力に条件づけられていた<sup>註4</sup>。生殖に関連する女性の苦悩を理解するためには、イスラエルの歴史に沿って、女性の身体を支配し抑圧してきた社会的、経済的、文化的、宗教的仕組みを理解する必要がある。

## 【注】

1. このインタビューは Enilda de PAULA PEDRO による修士論文『主は胎を閉ざされた』—サムエル記上 1 章 1—28 節に関する読解論文、São Paulo、Pontificia 神学大学、Nossa Senhora da Assunção、2000 年、9 頁より引用。
2. 聖書箇所の引用は大部分、エルサレム聖書新改訂版、サンパウロ、パウロ会、2002 年による。必要に応じて他の翻訳版も使用した。(訳注：日本語訳は新共同訳聖書、日本聖書協会、1995 年を用いた)。
3. 出産と創造の行為としての生殖に関しては、Phyllis A. BIRD, *Missing Persons and Mistaken Identities*, Minneapolis, Fortress, 1977, p.55.
4. このテーマに関しては、Carol MEYERS “Household and Holiness—The Religious Cultura of Israelite Women”, Minneapolis, Fortress, 2005 に良いまとめがある。

## 1. 「産めよ、増えよ」(創世 1 : 28)

聖書時代史や考古学の専門家によれば、士師時代(紀元前 1250—1030 年)、イスラエルの民がカナンの山岳地帯で生き延びることは生易しいことではなかったという<sup>註5</sup>。

環境的に見ても、その一帯は貧しい地域で、地形や気候、土壌や自然資源に関しても、何ら生産活動に有利な条件は備わっていなかった。土地は半砂漠地帯か、でなければ密林に覆われた地域であり、農業にも牧畜にも適していなかった。やがて鉄や石灰の発見に伴い、新しい農業技術が導入されるようになると、イスラエルの民は早速樹木を伐採し、石を取りのけ、土壌を改良して耕作地を造成した。また、石灰で漏水処置を施した貯水池に水を蓄えることによって、羊やヤギなどの山岳小動物に水を与えることができるようになった<sup>註6</sup>。

生き延びるため努力を続け、イスラエルの民は手間賃を稼ぐ術を身に付けるようになった。イスラエル原始農耕社会において、社会の最小構成単位は大家族であった。数世代を含む 2—3 家族で構成されており、祖父母、父母、子供たち、孫たち、使用人、他国からの寄留者まで同居していることもあり、総勢 50 人に及ぶ大家族である<sup>註7</sup>。これらの家族は共同の中庭に建てられた家に住んで、穀物や野菜果物などを栽培し、家畜を飼い、みんなの必要物

資を生産していた。生存のための営みに加わらない者は誰もいなかった。老人、男、女、子供まで皆なんらかの仕事を受け持った。旧約聖書は女性が請け負っていた労働について記述している<sup>注8</sup>。

### 【注】

5. Frank S. FRICK, *The Formation of the State in Ancient Israel*, Sheffield, Amond, 1985 (The Social Word of Biblical Antiquity Series, 4) ; Israel FINKELSTEIN, "The Emergence of Early Israel- Anthropology, Enviroment and Archaeology", em JOAS, vol.110, p.677-686; Amihai MAZAR, *Archaeology of the Land of the Bible*, New York, Doubleday, 1990
6. Shigeyuki NAKANOSE (中ノ瀬重之), *Uma História para contar—A páscoa de Josias*, São Paulo, Paulinas, 2000, p.134-135.
7. Karel VAN DER TOORN, *Family Religion in Babylonia, Syria and Israel*, Leiden, E.J. Brill. 1996, p.197.
8. 新約聖書における女性の仕事に関しては以下を参照。Phyllis A. BIRD, 1997, p.13-66; Fuziko KOHATA, "Diferença e preconceito em gênero no Antigo Testamento", 木田献一・荒井 献 (編集), *A ideologia da Bíblia e tempo de hoje*, 東京、日本基督教団、1996年、119-148頁。

一羊の群れを飼う。「ヤコブが彼らと話しているうちに、ラケルが父の羊の群れを連れてやって来た。彼女も羊を飼っていたからである。」(創世 29 : 9、Cf. 出エ 2 : 6)

一井戸に水をくみに行く。「(リベカは) 際立って美しく、男を知らない処女であった。彼女が泉に下りて行き、水がめに水を満たして上がって来ると、」(創世 24 : 16)

『早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。』(創世 18 : 6)

「(リベカはヤコブに言った) 家畜の群れのところに行つて、よく肥えた子山羊を二匹取つて来なさい。わたしが、それでお父さんの好きなおいしい料理を作りますから」(創世 27 : 9)

一機を織る。「彼 (サムソン) は彼女 (デリラ) に答えて言った。『わたしの髪の毛七房を機の縦糸と共に織り込み、ピンでとめれば、私の力は失せ、普通の男ようになるだろう』。そこで彼女は彼を眠らせ、彼の髪の毛七房を機の縦糸と共に織り込んでピンでとめた…」<sup>訳注</sup>(士師 16 : 13-14)

一産婦を助け、元気づける。「一同がベテルを出発し、エフラタまで行くにはまだかなりの道のりがあるときに、ラケルが産気づいたが、難産であった。ラケルが産みの苦しみをしているとき、助産婦は彼女に、『心配ありません。今度も男の子ですよ』と言った。」(創世 35:16 - 17)

一売春をする。「タマルはやもめの着物を脱ぎ、ベールをかぶつて身なりを変え、ティムナに行く途中のエナイムの入り口に座った。[...]ユダは彼女を見て、顔を隠しているのが娼婦だと思った。」(創世 38:14-15)

一神々や死者の世界と交信する。「サウルは家臣に命令した。『口寄せのできる女を探してくれ。その女のところに行つて尋ねよう。』家臣は答えた。『エン・ドルに口寄せのできる女がいます』(サム上 28:7、Cf. エレ 9:16、エゼ 32:16)

女性の労働は大部分が家と結びついている。家族の面倒、誕生や死など命にまつわること、食事や衣服の世話、様々の快樂を満たすこと、死者の供養、家での祭儀などであった。家事

の采配する女性の役割は、民衆の諺のなかでも明示されている。家屋保全の義務を怠らず、家内安全の責任を果たす彼女たちは、真珠より尊いと賞賛されている。

「羊毛と亜麻を求め 手ずから望みどおりのものに仕立てる。  
商人の船のように 遠くからパンを運んで来る。  
夜の明ける前に起き出して 一族には食べ物を供し 召使の女たちには指図を与える。  
熟慮して畑を買い 手ずから実らせた儲けでぶどう畑をひらく。  
力強く腰に帯し、腕を強くする。  
商売が好調かどうか味わい 灯は夜もきえることがない。  
手を糸車に伸べ、手のひらに錘をあやつる。  
貧しい人には手を開き、乏しい人に手を伸べる。」(箴言 31:13-20)

女性は実に良き家庭の管理運営者であった。家族の食事や衣類を作り、布地などの商売をして夜明けまで働いていた。家庭の領域における社会的役割の一つはまだ、良き母親であることであったといえよう。「息子らは立って彼女を幸いな人と呼び」(箴言 31:28)、「ハンナはとどまって子に乳を与え、乳離れするまで育てた。」(サム上 1:23)

明確に仕事として子を産み育てることを述べている箇所はそう多くは見られない。イスラエルの父権制社会にあつては、子を産み育てる行為は女性の自然で重要な義務であると考えられていた。どの子供の場合も、細心の注意と配慮をもって出産と子育てをする必要があつた。というのも、病気や戦争、その他の災難によって乳幼児の数は減り、拡大家族が生きながらえ、存続していくことが難しかったのである。考古学者よれば、士師期における高い乳幼児死亡率が墓地の発掘調査によって確認されている。

「未成年層における死亡率がとて高かったことは明白である。ある墓地では、5歳に達する前に35パーセントの子供が死に、約半数の子供は12歳を超えられなかったという明白な資料がある。成人まで生き延びることができた場合にでも、女性が出産年齢までに死亡する率は男性より圧倒的に高かった。男性が40歳までは生きると期待されるのに対し、女性は30歳くらいまでしか期待されていないという生存率である。」<sup>注9</sup>

乳幼児の死亡率が高いと、社会の存続のため、できるだけ沢山の子を産むように女性に圧力がかかる。田畑や家での重労働に加えて、女性は「苦しみと危険を伴う辛い仕事」をすることを義務づけられる。(Cf. 創世 35:16-20、民数 12:12、サム上 4:19-20、イザ 26:17) それは、男性に対してなぜ女性の方に死亡率が高いかを説明している。生殖行為は、生存するために必要不可欠である。イスラエルのあるグループは、生存と抵抗の手段として、生殖行為の重要性を記録に残している。「しかし、虐待されればされるほど彼らは増え広がったので、エジプト人はますますイスラエルの人々を嫌悪し、」(出エ 1:12) 同様の期待のもとに、ベニヤミン人は容赦なくシロの娘たちを生殖行為の必要を補うために誘拐した。(士師 21) 後の時代になると、子を産み育てる女性の役割は国家が抑圧と暴力のために利用することによって、強化される。

イスラエルの国家統一はダビデ王によって達成され(紀元前 1010-970年)、続くソロモン王の統治のもとで、国家は堅固になり安定した(紀元前 970-931年)。その新しい政府組織は、近隣の民族の統治構造と類似しており、とりわけエジプト帝国を模倣したものであった。

王は油注がれた者、つまり、主なる神（ヤハウエ）によって選ばれた人である<sup>註10</sup>（サム下 2:4、列王上 1:39）。預言者に油注がれることによって、王は民を統治するために神の霊を受けるのである。しかし、王は民衆のために政治を行わず、エリート高官を優遇するのが常である。やがて王と高官たちは民衆を支配し搾取するようになる。彼らは自分たちの利益を守り、権力を保つために、次第に軍隊と公的宗教を強化するようになる。これら二つの制度は国家の徴税を正当化するために利用され、民衆は服従と納税を強いられる。貴族や軍人、聖職者は都市部に住み、農村部の住人によって生活を支えられている。

「わたしは言った。聞け、ヤコブの頭たち、イスラエルの家の指導者たちよ。正義を知ることが、お前たちの務めではないのか。善を憎み、悪を愛する者、人々の皮をはぎ、骨から肉をそぎ取る者らよ。」（ミカ 1:1-2）

国家の歴史が進展するにつれ、王は生産業についても、臣下たちの公共事業や軍隊に対しても権力を強化し拡大していく。国家のために一定期間の強制労働が男女の自由農民、あるいは彼らの息子、娘たちにすら課せられる。「彼(王)はあなたたちの息子を徴用する。それは、戦車兵や騎兵にして王の戦車の前を走らせ、王のための耕作や刈り入れに従事させ、あるいは武器や戦車の用具を造らせるためである。また、あなたたちの娘を徴用し、香料作り、料理女、パン焼き女にする。」（サム上 8:11-13）

国は農村部の人々とその生産物を最大限に搾取する。絶え間なく勃発する戦争は、男たちを戦争に駆り立てる。男たちがいなくなると、その分女たちの仕事は、家事も農作業も2倍になる。さらに、彼女らは宮廷や神殿聖所の家事労働も強制される。次第に、国への奉公のために農民は土地を手放さざるを得なくなり家は崩壊していく（Cf. ホセ 4:1-3）。こうして制度化された暴力、戦争とその蛮行は民衆の生活を侵食し、日常生活にまで達した。特に子を産み育てる役割を担う女性と、子供たちの命が脅かされることになる。

「わたしはあなたがイスラエルの人々に災いをもたらすことを知っているからです。あなたはその砦に火を放ち、若者を剣にかけて殺し、幼子を打ちつけ、妊婦を切り裂きます。」（列王下 8:12、Cf. 15, 16 ; ホセ 14:1）

「エフライムの栄えは鳥のように飛び去る。もう出産も、妊娠も、受胎もない。たとえ、彼らが子供を育てても、わたしがひとり残らず奪い取る。彼らからわたしが離れ去るなら、なんと災いなことであろうか。」（ホセ 9:11-12）

「エフライムは撃たれた。彼らの根は枯れ、実を結ぶことはない。たとえ子を産んでも、その胎の実、愛する子をわたしは殺す。」（ホセ 9:16）<sup>註11</sup>

#### 【注】

9. Carol L. MEYERS “The Roots of Restriction—Women in Early Israel”, em Norman K. GOTTWALD (ed.), *The Bible and Liberation—Political and Social Hermeneutics*, Maryknoll, Orbis Books, 1984, p.295
10. ヤハウエの起源については以下を参照されよ。Karel VAN DER TOORN, 1996, p.281-286; Marks S. SMITH, *The Early History of God—Yahweh and the Other Deities in Ancient Israel*, Michigan, Dove Booksellers, 2002.
11. ホセア 9:11-16 は女性たちの抵抗のテキストのひとつとして解釈される。Tânia Mara VIEIRA SAMPAIO,

“O corpo excluído de sua dignidade (尊厳をはく奪された体) —uma proposta de leitura feminista de profecia(女性の視点で読む預言の一試案)” em Mandrágora, São Bernardo do Campo, サンパウロメソジスト大学, ano1,n.1, 1994, p. 40-46.を参照されよ。不妊の問題に関しては、Ann MARMESH,

“Anti-Covenant” ,in Mieke BAL,(ed.), “Anti-Covenant” : Counter-Reading Women’s Lives in the Hebrew Bible” , in JSOTSup, vol.81, Bible and Literature Series 22, Sheffied Academic, 1989, p.43-60.

紀元前587年、バビロニアの王ネブカドネザルがユダと首都イスラエルに攻め入り、崩壊させ、幾数万の人々が犠牲となった。いわゆるバビロン捕囚である。イスラエルの民の生活をさらに窮地に至らせる、一国の大参事であった。人々は逃げ惑い、強奪され、飢えにさらされ、捕囚にされ、虐殺された(哀歌参照)。「この民は略奪され、奪われ、皆、穴の中に捕えられ、牢につながれている。略奪に遭っても、助け出す者はなく、奪われても、返せと言う者はない。」と第二イザヤはバビロン捕囚について述懐している(Ⅱイザヤ44:22)。

ユダはこの期間殆ど半数の人口を失う。子供たちはおらず、国家存続の見込みも、希望もなくなった。日々なすべきことは再建、再住、再生産である。「産めよ、増えよ。」(創世1:28)

バビロン捕囚は紀元前538年に終結を迎える。ユダヤ民族の再建を可能にしたのは、ペルシャ帝国の王キュロスであった。それは民にとって苦難の終焉のように見えた。けれども、さらに悪いことが待ち受けていたのである。ペルシャ人は、支配を容易にするためにユダの上層階級の統治計画を優遇する、つまり聖職者による統治(神聖政治)、神殿体制、浄・不浄の律法、罪の浄めのための犠牲奉献、神殿税など…歴史は繰り返される。ユダの旧エリート層の子孫たちはペルシャと同盟を結び、搾取と排斥の古い仕組みを改めて持ち込むのである。神殿と律法体制は、税の徴収に効果的な手段となり、あらゆる人間生活の局面、基本的な生殖行為にまで及んだ。

「女児を出産したとき、産婦は月経による汚れの場合に準じて、十四日間汚れている。産婦は出血の汚れが清まるのに必要な六十六日の間、家にとどまる。男児もしくは女児を出産した産婦の清めの期間が完了したならば、産婦は一歳の雄羊一匹を焼き尽くす献げ物とし、家鳩または山鳩一羽を贖罪の献げ物として臨在の幕屋の入り口に携えて行き、祭司に渡す。」(レビ12:5-6)

人口の大半は、土地を持たない農民で、搾取、失業、飢え、極貧、奴隷生活、早過ぎる死を体験する。「人は地境を移し、家畜の群れを奪って自分のものとし、…父のない子は母の胸から引き離され貧しい人の乳飲み子は人質に取られる。…町では、死にゆく人々が呻き…」(ヨブ24:2, 9, 12) 身体は基本的に不浄の源とされ、特に女性の体は不浄ゆえに神殿に利益をもたらし(!)、女たちの胎は子を孕むべきものとされていく。

2. 「わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。」  
(創世17:2)

「アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。『わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。』」(創世17:1-2)

「あなたをますます増やすであらう。」男性神であるヤハウエとアブラムとの間に交わされた契約の言葉を通して、我々は子を産み育てることが父権制社会の最も重要な支柱の一つであることに気づかされる。イスラエル史の進展に伴い、それは、集団や土地、家、遺産等々の存続と結びついた生存維持の問題となり、国家の利益にも沿うものとなる。したがって、女性の胎は管理され、律法や儀式のもとに縛られていく。子を産み育てるのは家族のためであり、村落共同体、しいては国家のためであるとされ、もろもろの慣習やタブー、規則が女性の身体を利用することを正当化していく。女性の身体の管理は、一つの父権制社会にあって、生殖の問題以上に男性性の認証が賭かっているのです、なおさら強化される。この文脈において、男性性は、戦時の兵力と受精力という二つの基準を示すものとなる<sup>註12</sup>。権力を手中にする者は、尊ばれ守られるべき利益や規律を人々に課さねばならない。ある律法はこう規定する。

「だれも父の妻をめとって、父の衣の裾をあらわにしてはならない。」(申命 23:1)

「婚約しただけで、まだ結婚していない者はいないか。その人は家に帰りなさい。万一、戦死して、ほかの者が彼女と結婚するようなことにならないように。」(申命 20:7)

「男が人妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪をとり除かねばならない。」(申命 22:22)

#### 【注】

12. Harold C. WASHINGTON, “‘Lest He Die in the Battle and Another Man Take Her’ Violence and the Construction of Gender in the Laws of Deuteronomy 20-22”, em David CLINES e Philip R.DAVIES(eds.), “Gender and Law in the Hebrew Bible and the Ancient Near East”, em JSOTSup, vol.262, Sheffield, Sheffield Academic Press 1998, p.185-213.

法は、家庭や地域共同体、国家の必要性や具体的利益を守るために生まれるものである。人々(=男たち)の権利が踏みにじられることがあってはならない。人々の権利が保障されてこそ、社会生活や共同体生活の規律は保たれるのだから。女性は男性に所属するものであり、女の身体とその実は男の所有物であった。男が損害を被らないように、法は彼の財産を不正な侵害から守ることを目的としている。以下を参照せよ。

「男たちがけんかをして、妊娠している女を打ち、流産させた場合は、もしその他の損傷がなくても、その女の主人が要求する賠償を支払わねばならない。仲裁者の裁定に従ってそれを支払わねばならない。もし、その他の損傷があるならば、命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足、やけどにはやけど、生傷には生傷、打ち傷には打ち傷をもって償わねばならない。」(出エ 21:22-25)

「ある男がまだ婚約していない処女の娘に出会い、これを捕らえ、共に寝たところを見つけられたならば、共に寝た男はその娘の父親に銀五十シケルを支払って、彼女を妻としなければならない。彼女を辱めたのであるから、生涯彼女を離縁することはできない。」(申命 22:28-29、Cf. 出エ 22:15-16)

法は、第一に男の財産が侵害された場合の補償を想定して、男たちの権利を保障する。一見すると、法は、女たちが社会から保護されるための機会を設け、女たちの状況を平穏なものにしようとしているように見える。しかし同時に、法は、女たちを「子を産み育てる者」、

家事労働者として家の中、家族の中に守り閉じ込めることを照準としている。女性の生活領域は家であり、家庭であることを示している。名誉は、第一に、家の主人たる父親や夫に帰せられる。言葉を変えて言えば、女性の身体は、第一に、家族のため、共同体のため、国のために義務を負うものとされ、生活習慣や名誉と恥の文化によって型にはめられ、儀式によって管理されている。凌辱され、犠牲にされ、男たちの名誉や、社会の利益の名のもとに忘れ去られていった夥しい女たちの物語が存在する。

ーディナに対する暴力（創世 34 章）：ハモルの息子シケムが彼女を凌辱。彼女の兄弟たちは、無割礼者たちに対して家の名誉を擁護する口実で、ハモルもシケムも殺す。しかし、話のどこにもディナ自身の声が記されていないことに注意すべき。

ーエフライムのレビ人の側女の死（士師 19 章）：彼女は、自分の主人の命を救うためと、旅人のもてなしを規定する法遵守のために、ベニヤミン人の男たちに凌辱され、弄ばれて死んだ。レビ人の名誉は誇示され、そのために側目の死体は寸断されねばならなかった。

ーアブサロムの妹、タマルへの暴力（サム下 13 章）：彼女は腹違いの兄アムノンによって凌辱を受ける。妹の名誉への復讐を口実に、アブサロムは王位継承の最も強力な競争相手であるアムノンを殺す。アブサロムは妹を慰める代わりに、黙らせ家に閉じこもらせる。『妹よ、今は何も言うな。彼はお前の兄だ。このことを心にかけてはいけない。』タマルは絶望して兄アブサロムの家に身を置いた。（サム下 23:20）

文献研究によると、これらの物語には様々な編集者の手が加わっているという。恐らくは、これらのテキストは、イスラエル史上のいろいろな時期の出来事や習慣、規則やタブーといったものを反映しているに違いない。しかし、女性についての扱いは同じ現実を映し出しているといえよう。女性の体はいつも暴力を受け、虐待され、支配され、利用されている。女性は男性が作り上げた仕組みのなかに閉じ込められている。国家、神殿、民族、家族、家、法律といった仕組みのなかに。そこに女たちは身体や活力、感情を捧げて生きるように強いられるのである。

「兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない、亡夫の兄弟が彼女のところに入り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない。もし、その人が義理の姉妹がめとろうとしない場合、彼女は町の門に行って長老たちに訴えて、こう言うべきである。『わたしの義理の兄弟は、その兄弟の名をイスラエルの中に残すのを拒んで、わたしのために兄弟の義務を果たそうとしません。』町の長老たちは彼を呼び出して、説得しなければならない。もし彼が、『わたしは彼女をめとりたくない』と言い張るならば、義理の姉妹は、長老たちの前で彼に近づいて、彼の靴をその足から脱がせ、その顔に唾を吐き、彼に答えて、『自分の兄弟の家を興さない者はこのようにされる』というべきである。彼はイスラエルの間で、『靴を脱がされた者の家』と呼ばれるであろう。」（申命 25:5-10）

これはレビラート婚と呼ばれる法を記したテキストである（レビール levir=夫の兄弟）。男性は自分の兄弟が息子をもうけず死んだ場合、その妻をめとらなければならない。この婚姻によって男の子が生まれたら、その子に死んだ父の名をつけ家系を継がせるのである。事



実、男性の血統を通してのみ遺産が受け継がれていく父権制社会にあって、未亡人はその胎の実によってのみ家系に組み入れられるのである。レビラート婚法において、義理の兄弟から拒まれた未亡人の絶望と屈辱は“彼の靴をその足から脱がせ、その顔に唾を吐き”と明記されている。息子を持たないと、女性にとって未来はないも同然である。

この律法に町の長老たちの驚くべき介入が記されていることから、未亡人への侮蔑がさらに明白に現れている。つまり、名誉と恥の文化を特徴とする男性社会にあっては、女性は公の場で男を馬鹿にし、名誉を棄損する存在とみなされている<sup>註14</sup>。長老たちの介入は家庭とその財産を保護しようとする父権制社会の強い配慮と手はずであると理解すべきである。と同時にまた別の必要性もある。それは、生殖行為を、社会を組織し支配する者の権力と利益につないでおくために、未亡人を保護し、家庭内に加え入れることである。この意味で、女性の身体への権力支配は、生理や妊娠の検査、調節にまで介入してくる。

「あなたが敵に向かって出陣し、あなたの神、主が敵をあなたの手に渡され、捕虜を捕えたとき、その中に美しい女性がいて、心引かれ、妻にしようとするならば、自分の家に連れて行きなさい。彼女は髪を下し、つめを切り、捕虜の衣服を脱いで、あなたの家に住み、自分の両親のために、一か月の間嘆かなければならない。その後、あなたは彼女のところに入ってその夫となり、彼女はあなたの妻となる。」(申命 21:10-13)

この律法は、戦争で捕虜となった女性たちを、法的に認知して家の中に迎え入れる行為を推奨するものである。彼女らは人間として尊敬されるべきであって、一ヶ月間、自分の父の家を失った苦しみ悲しみを嘆くために長い儀式を執り行う。一見、非常に人間的な法のようにだが、最近の研究では、捕虜の女性の妊娠の有無を調べ、夫の利益を保護する法であることが指摘されている。そのために、彼女は一ヶ月間家の中に閉じ込められねばならないのである<sup>註15</sup>。結婚後には、女の体についての男たちの利益と心配事が見え隠れしている。生殖性は管理されるものである<sup>註16</sup>。その管理の文脈でこそ、我々は批判的視線でイスラエルの宗教、彼らの神々、女性の身体についての儀式やタブーを見ていなければならないのである。

### 【注】

14. 名誉と恥の社会的管理については、以下の文献を参照されよ。

Victor H MATTEWS, “Honor and Shame in Gender and Law in the Hebrew Bible” in David J.A. CLINES and Philip R. DAVIES (eds), “Gender and Law in the Hebrew Bible and ancient Near East” in JSOTS<sup>Sup</sup>, vol. 262, Sheffield, Sheffield Academic, 1998, p.97-112.

15. Harold C. WASHINGTON, 1998, p. 202-207

16. Ann MARMESH, 1989, p. 57.

### 3. 主はハンナの胎を閉ざしておられた。(サム上 1 : 5)

「彼女は更に(父エフタに)言った。『わたしにこうさせていただきたいのです。二か月の間、わたしを自由にしてください。わたしは友達と出かけて山々をさまよい、わたしが処女のまであることを泣き悲しみたいのです。』(士師 11 : 37)

エフタの娘が、子をもうけることなく死なねばならなかったことを物語る悲劇的な個所である<sup>註17</sup>。彼女は父親が神に誓った誓いを果たすために犠牲となり、いけにえとして奉獻されねばならなかった。エフタの娘だけでなく彼女の友達やほとんどすべての女性たちにとって、妻にならず母親とならないことは、代々にわたって不名誉であり恥であるとみなされた。旧約聖書のなかで、いろいろな女性の人生に、子をもたない恥と不幸が付きまとっている様子が現れている。

— 「アブラムはハガルのところに入り、彼女は身ごもった。ところが、自分が身ごもったのを知ると、彼女は女主人を軽んじた。サライはアブラムに言った。

『わたしが不当な目に遭ったのは、あなたのせいです。女奴隷をあなたのふところに与えたのはわたしなのに、彼女は自分が身ごもったのを知ると、わたしを軽んずるようになりました。主がわたしとあなたとの間を裁かれますように。』(創世 16 : 4-5)

— 「ラケルは、ヤコブとの間に子供ができないことが分かると、姉をねたむようになり、ヤコブに向かって、『わたしにもぜひ子供を与えてください。与えてくださらなければ、わたしは死にます』と言った。ヤコブは激しく怒って、言った。『わたしが神に代われるというのか。お前の胎に子供を宿らせないのは神御自身なのだ。』(創世 30 : 1-2)

— 「いけにえをささげる日には、エルカナは妻ペニナとその息子たち、娘たちにそれぞれの分け前を与え、ハンナには一人分を与えた。彼はハンナを愛していたが、主はハンナの胎を閉ざしておられた。彼女を敵とみるペニナは、主が子供をお授けにならないことでハンナを思い悩ませ、苦しめた。毎年、彼らが主の家に入るたびに、エルカナはこのように行い、ペニナはハンナを苦しめた<sup>註</sup>。今度もハンナは泣いて、何も食べようとしなかった。」(サム上 1 : 4-7)

ここには子供を持たない女性たちの苦しみのドラマがある。不妊の女と結婚していない女に課せられた差別と圧迫がはっきり見えてくる。それと同時に、編集上の問題があるにせよ、これらのテキストは、ヤハウエ (=主) と女性たちとの関係を理解する鍵を提供している。エフタが娘を奉獻した神は、生と死を支配される主である。女性の身体に対して絶対的な権力を持ち、多産性を与えたり、不妊性を与える神、女性の胎を開いたり閉じたりする神である(Cf. 創世 20, 17-18)。子を持つことは神の恵みで、子を持たないことは神の罰なのだ。そのようなヤハウエとは一体だれなのか？その起源と他の神々との関係が定かではないにしても、男性中心、父権制社会の利益や慣習に結びついた男性神で中央集権者のようである<sup>註18</sup>。

#### 【注】

17. エフタの娘の物語に関しては以下を参照されよ。Peggy L. DAY, “From the Child Is Born the Woman—The Story of Jephthah’s Daughter”, in Peggy L. DAY(ed.), *Gender and Difference*, Minneapolis, Fortress, p.58-74

18. Carol DELANEY, “The Legacy Abraham”, in Mieke BAL(ed.), “Anti- Covenant: Counter-Reading Women’s Lives in the Hebrew Bible”, in *JSOTSup*, vol. 81, Bible and Literature Series 22, Sheffield, Sheffield academic, 1989, p. 27-41.

訳注：この一行「毎年、彼らが主の家に、…ペニナはハンナを苦しめた。」については、新共同訳聖書の訳に従わず、原文を私訳した。

興味深いことに、特にダビデ王朝の歴史において、この中央集権的神の強化がみられる。王制が、エルサレム神殿で公式に崇拝される、近寄りがたい、力強い軍神ヤハウエを造り上げ、強化するのである<sup>註19</sup>。地方の住民は神殿に宮詣し、巡礼し、祭りに参加し、礼拝をささ

げ、ハンナの物語に見られるように、子供が授かる祝福を願う際に、誓いを立てることを義務づけられていた。

「ハンナは悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いた。そして、誓いを立てて言った。『万軍の主よ、はしための苦しみを御覧ください。はしために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主におささげし、その子の頭には決してかみそりを当てません。』」（サム上1：10-11）

サムエル記上は申命記歴史家によって編纂された歴史書の一部である。ハンナの物語は恐らく、ヨシヤ王の時代（紀元前640-609年）のものであろう。その時代背景には、エルサレム神殿中心主義を強化することによってユダとイスラエルを統一し、政治的宗教的改革を推進しようとする状況がある<sup>注20</sup>。ヨシヤの宗教改革の神学的視点によれば、ヤハウェは唯一神で、ダビデ王朝の守護神であった。それゆえ、王は神の子であり、神と民の間を取り持つ者である。ヤハウェとイスラエルの民との間に成立した契約は、ヤハウェとダビデ王、またその子孫との間の契約にすりかえられていった。それゆえ、ダビデの町エルサレムの神殿は、ヤハウェが臨在される唯一の場所となり、そこにおられる神が土地の豊穡性と女性の多産性を管理するのである。民衆は農作物を納め、息子を軍隊や強制労働へ送るという仕方ですべて神殿への貢物とした。その見返りに、ヤハウェが豊作と多産を祝福として与えるのである。

ハンナは誓願が報われ、女性の胎の管理者であるヤハウェから祝福を受け、妊娠する。そのようにしてやっと、彼女は父権制社会のなかで被ってきた恥辱と抑圧から解放され、「三歳の雄牛一頭、麦粉を一エファ、ぶどう酒の革袋を一つ」（サム上1：24）を奉献する。そういう形で、ヤハウェによる生殖性への制御が、神殿の金庫をあふれんばかりに豊かにしているのである。

バビロン捕囚以降、祭司による神聖政治が堅固になるにつれ、女性の身体へのヤハウェによる管理が強化されていく。管理に清めの律法が導入され、祭司たちは新たに法を制定し、儀式のもとに、生理の場合と同様、女性の身体の清めの手続きを合法化していく。

「女性に出血があり、それが体からの出血ならば、七日間は月経期間であり彼女は汚れている<sup>聖注</sup>。（中略）彼女が出血の汚れから清くなり、七日間が過ぎたならば、その後は清くなる。八日目に、彼女は二羽の山鳩か家鳩を調べ、それを臨在の幕屋の入り口で祭司に渡す。祭司は一羽を贖罪の献げ物、他の一羽を焼き尽くす献げ物として主の御前にささげ、彼女の出血の汚れを清めるために贖いの儀式を行う。」（レビ15：19, 28-30）

この律法には、女性の生理期間の後、女性の身体の清めのために儀式による祭司の介入が見られる。様々の文化に女性の生理に関するタブーが存在する。けれども、レビ記のテキストでは、生理が罪のように扱われ、その清めのためにヤハウェの仲介が必要とされる。月ごとに女性たちは汚れて、ヤハウェと神殿に対して「定期的な負債者」となる<sup>注21</sup>。最悪なことにこの神学は、女性たちをヤハウェの聖なる場所から遠ざけ、締め出し、男性の祭司の統治と搾取のもとに服従させるのである。

女性の身体、生理や血液、子宮と生殖性は、いのちの力、社会の力を内に含むものである。宗教や律法は、そのいのちの力学のうちに生まれ、育まれるものではないのか。けれども旧

約聖書において、多くの場合、それらは支配と服従、排斥のための装置として矮小化され、権力保有者の都合のいいように組み立てられ固定していく。そのようにして、女性から出るものは罪であると断定される。生理があり、子を産む性を持つ女性であることそのものが、悪いもの、少なくとも汚れたものと見なされている。「女性の血液は汚いもの、不浄で危険なものである。そして、そのような認識はキリスト教の伝統のなかにも続いていく。」<sup>注22</sup>

#### 【注】

19. 原初のイスラエル民族の大部分はカナン人で、多様な男性神、女性神を信じていた。そのなかには、死んだ親戚を神として礼拝するものも含まれている。ヤハウエはサウル王によって国家宗教に導入され、歴史が進展するにつれて、唯一の男性神として確定していった。さらにイスラエルの国家宗教について資料が必要ならば、以下を参照されよ。Elizabeth BLOCH-SMITH, “Judahite Burial Practices and Beliefs about the Dead”, in *JSOTSup*, vol. 123, American Schools of Oriental Research Monograph Series 7, Sheffield, Sheffield Academic, 1992; Karel VAN DER TOORN, 1996, p. 181-379; Marks S. SMITH, *O memorial de Deus-História, memória e experiência do divino no Antigo Israel*, São Paulo, Paulus, 2006; Rainer ALBERTZ, *A History of Israelite Religion in the Old Testament Period*, vol. 1-2, Louisville: Westminster/John Knox Press, 1994.
20. 中ノ瀬重之著 “Javé fechou o útero-Uma leitura de 1Samuel 1, 1-28”, em *Estudos Bíblicos*, Petrópolis, Vozes, vol. 54, 1997, p. 34-43.
21. Nancy CARDOZO PEREIRA, “Comida, sexo e saúde - Lendo o Levítico na América Latina”, em *Revista de Interpretação Bíblica Latino-Americana*, Petrópolis, Vozes, vol. 23, 1996, p. 133-160.
22. Ivone GEBARA, *Rompendo o silêncio*, Petrópolis, Vozes, 2000, p. 34.

#### 4. 女性は子を産むことによって救われる（テモテへの手紙一 2 : 15）

「婦人は、静かに、全く従順に学ぶべきです。婦人が教えたり、男の上に立ったりするのを、わたしは許しません。むしろ、静かにしているべきです。なぜならば、アダムが最初に造られ、それからエバが造られたからです。しかも、アダムはだまされませんでした。女はだまされて、罪を犯してしまいました。しかし婦人は、信仰と愛と清さを保ち続け、貞淑であるならば、子を産むことによって救われます。」（Iテモテ 2:11-15）

最初期のキリスト教共同体において、大多数の女性たちは、家庭、教会や社会生活の通念、慣習、タブー、規則、神学、行動様式といったものに服従している。子を産み育てる母性によってのみ女性は神に祝福され、贖われるのである。女性の救いの道は、ひとりの男性神と、自分が従属している男性たちによって規定されている。女性の子宮、身体、性生活は男性の利益や満足に合わせて操作される。神に祝福された結婚においては、女性たちの身体は子を産み育てる母性のためにのみ奉仕するものでなければならない。「産めよ、増えよ」。この神学はわたしたちの教会のなかでも長いこと受け継がれてきた。

しかし、今日、社会は新自由主義、物質主義、ハイテクノロジーをその特徴とし、女性の身体の管理は逆方向に向かっている。新自由主義の動向は、エリートたちの安泰な暮らしを守る方に進んでいく。この階層の人々にとって幸せとは、悩み苦しみを知らず、誰からも被害をこうむらないことなのである。エリート層にとって、抑圧された人々が増えることは脅

威である。彼らは富を分配することを恐れている。大多数の貧困者の存在はそれ自体、すでに不平等な社会が存在することへの告発である。そこで、貧困者を増やさないことが必要となる。そこから人口統制政策が現れる。だから、戦争の頻発、飢餓や病気の蔓延、避妊薬の無差別配布、違法な妊娠中絶の増加等々が多数の貧しい女性たちの死を惹き起こしているのである<sup>注23</sup>。この過酷な現実のなかで我々は生きている。不手際なもぐりの中絶で娘を失う母親の気持ちは如何ばかりであろうか？闘っていかなければ！抵抗していかなければ！

旧約聖書の中には、生きるために闘う女たち、男たちが沢山登場する。例えばタマル（創世 38 章）や、ロトの娘たち（創世 19：30-38）は子孫をもうけるために闘った女性たちである。恐らくこれらの物語は、父権制社会における相続財産や家系や男性名の継承についての危惧を反映しているものであろう。しかし…、タマルやロトの娘たちは、自分の身体や子宮や女性性の主（あるじ）である。イスラエルのような父権制社会にあって、彼女たちは主導性をもって、死に打ち勝つ生命を獲得するのである。

過去と同様現在においてもなお、闘いは続いている。すなわち、自分自身の身体も他者の身体も大切にすること。性差別や民族差別のない、平等で助け合う共同生活を人々の間に形成すること。地球の中で、地球と共に生きていくこと。これらのすべてを実現させるための第一歩は、先に実例として挙げたテレーザさんの談話のように、非人間的な状況に対する感受性や憤りを呼び覚ますことである。他者の痛みを肌で感じて、心を揺すぶられる能力を取り戻すことが必要である。特に、いまだに父権制、男中心世界の特質を持つ極度の苦況のなかに生きている人々の苦痛を感じ取らなければ。同時にまた、締め出しを執拗に続けている法律や社会構造を変えていくために、抵抗運動の組織化も必要である。「子供を持たないのは呪いなのでしょうか？誰の呪いですか？」

#### 【注】

23. 厚生省によると、ブラジルでは年間 1.443.350 件の妊娠中絶が行われている。違法中絶による健康障害で治療を受けるために入院する女性の数は年間平均 238.000 人に及ぶ。2006 年 11 月 30 日付アクセス。

[www.ipas.org.br](http://www.ipas.org.br)

出典：Ribla (Revista de Interpretação Bíblica Latino-Americana), Petrópolis, 2007, n. 57  
p.45-58.

日本語訳：小井沼眞樹子